

## 葉ネギ（小ねぎ）

ネギは、ヒガンバナ科ネギ属に属する多年草で、タマネギの近縁種である。原産地は中央アジアと中国西部と言われ、東アジア地域では食用に栽培されている。本邦ではネギは葉が太く白い葉鞘の多い「長ネギ」（根深ネギ）と葉が細く緑の葉身の多い「葉ネギ」に分けられる。長ネギは本邦では関東地方では下仁田ねぎに代表される根深ネギ系が、関西では九条ねぎに代表される葉ネギ系が好まれる傾向がある。

葉ネギはその名が表す通り、緑の葉の部分がほとんどで、白い葉鞘部分が少ないのが特徴で、葉は先端までやわらかく、根元近くからの分けつに伴い、地下球根も分球する習性がある。緑の葉には特異な刺激性の匂いがあり、辛味と独特の香りがあるため、本邦では古くから冷奴、そば、うどんなどの薬味として用いられる。

葉ネギはその栽培方法により、種子から栽培するタイプと球根から栽培するタイプに分けられている。種子タイプは九条ネギ、万能ネギ、ワケネギなど、球根タイプはワケギ、アサツキ、廿日ネギなどがある。

農林水産省の統計データは、長ネギと葉ネギを纏めて統計するもので、別々の生産統計データがない。2019 年本邦のネギ栽培面積 2.24 万ヘクタール、収穫量 46.53 万トンとされているが、そのうち長ネギが全体の 8 割以上を占め、葉ネギの栽培面積と収量が 2 割未満と推定される。

葉ネギの栽培面積が多くないが、それでも薬味として一定の需要があるので、本篇は葉ネギの栽培だけを解説する。

### 一、葉ネギの生育ステージ

葉ネギは涼しい気候を好み、発芽温度 15～25℃、最適発芽温度 20℃、生育適温は 10～25℃である。寒さに強く、0℃以下の低温にも耐えられ、凍死しない。暑さに弱く、30℃を超えると、その生育が抑制される。寒冷地と冷涼地では春から秋まで栽培することができるが、中間地と温暖地では季節を問わず、年中栽培することができる。

葉ネギは葉が細長いので、ちょっとした風でも折れてしまうことが多い。病害虫を防除するためにも、ハウス栽培やトンネル栽培を勧める。露地栽培の場合は防風ネットなどの風よけを立てる必要がある。

葉ネギの生育ステージは栄養成長期と生殖成長期に分けられる。栽培の都合上、種子タイプ葉ネギの栄養成長期は幼苗期、（定植活着期）、茎葉展開期に分けられ、球根タイプ葉ネギの栄養成長期は茎葉展開期だけである。種子タイプと球根タイプとも生殖成長期は抽苔期、開花期と子実成熟期に分けられる。ただし、葉ネギは茎葉展開期中期にすでに収穫されるので、採種を除けば、抽苔開花まで栽培することがない。図 1 は葉ネギの栽培ステージと各ステージに主に行う農作業を示す。

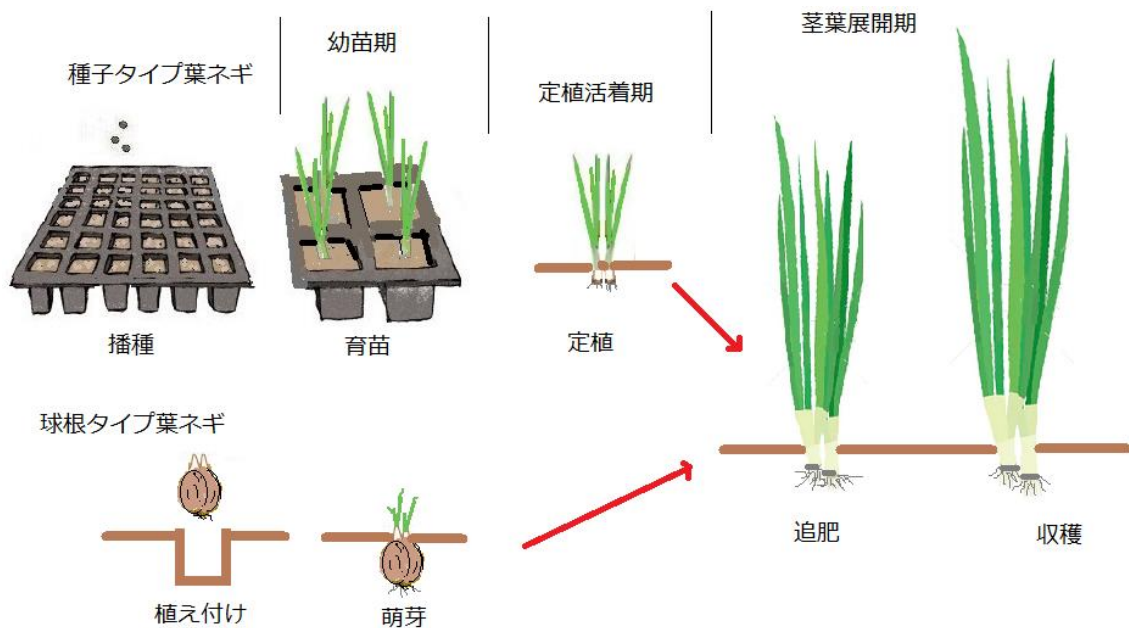


図 1. 葉ネギの栽培ステージと主な農作業

種子タイプ葉ネギの幼苗期は播種から苗が2～3枚の本葉が出るまでの期間である。直播きと育苗移植の二つの栽培方法があるが、発芽と幼苗の生育が緩慢であるため、多くの農家は直播きではなく、育苗箱かセルトレイで育苗してから移植するという手法を採用する。

18～20℃の地温では播種後7～10日発芽するが、それより低い温度ではさらに日数がかかる。地上に子葉が出るまでに苗の生長に必要な養分は種子の貯蔵養分に依頼して、外部から水分だけを吸収する従属栄養期である。子葉が出てからは根が土から養分を吸収し始め、種子からの従属栄養から独立栄養に移行する。

育苗箱およびセルトレイ育苗では種播き60～70日後、苗が3～4枚の本葉が出た時点で、圃場に定植する。

定植活着期は苗が圃場に定植してから活着するまでの期間である。定植してから約7～10日後活着し、圃場から養分を吸収して生長を続ける。

一方、球根タイプ葉ネギは種球としての球根を直接圃場に植え付け、萌芽してから茎葉展開期に入る。

茎葉展開期は株がゆっくりと新葉を展開して伸びる時期である。葉色は次第に濃くなるが、茎の節間がほとんど伸長しないため、地上茎が極端に短く、筒状の葉は基部が重なった放射状に上へ向けて伸長する。

葉ネギの生長が遅く、収穫時期は品種により大きく開いている。九条ネギ、万能ネギなど種子タイプ葉ネギは定植してから約50～100日後に草丈30～40cm以上に成長した時点で収穫するが、ワケギ、アサツキ、廿日ネギなど球根タイプ葉ネギは球根を植え付けてから約30～60日後に草丈30～40cm以上に成長した時点で収穫が可能となる。なお、収穫期間が

長いので、抽苔しない限り、市場の需要に合わせて収穫・出荷することができる。

葉ネギは低温により花芽分化が誘起される。ある程度成長した植株が 10℃以下の低温に 20～30 日遭遇すると、花芽が形成し、その後の高温と長日条件で抽苔する。1～7 月に播種するものは低温による花芽分化が誘起されても、翌年春先の抽苔まで余裕があり、すでに収穫されるので、栽培期間中に抽苔の恐れがない。8～10 月播種するものは一定の大きさに成長した植株は冬季低温に遭遇すると、翌年 4～5 月に抽苔する可能性が高い。

## 二、葉ネギ栽培の主な農作業

種子タイプ葉ネギ栽培の農作業はその作業順で主に畑の耕起と整地、基肥施用、播種・育苗、定植、追肥、中耕、病害虫と雑草防除、収穫である。球根タイプ葉ネギ栽培の農作業は畑の耕起と整地、基肥施用、球根の植え付け、病害虫と雑草防除、収穫、追肥、中耕、再収穫である。図 2 は種子タイプ葉ネギの露地栽培暦である。

栽培地域	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
寒冷地 冷涼地			播種		定植				収穫			
中間地				播種			定植			収穫		
温暖地				播種			定植			収穫		

図 2. 各地域の種子タイプ葉ネギの栽培暦

北海道や東北のような寒冷地域および海拔の高い高原冷涼地では、2 月下旬～4 月中旬に播種して、60～70 日の育苗期を経て 4 月下旬～6 月下旬に定植し、7 月上旬～11 月下旬に収穫する。初春の低温に対応して、育苗は必ずビニールハウスなど加温できる施設内で行う。

関東や東海の中間地域では、2 月下旬～9 月下旬に播種することができる。60～70 日の育苗期間を経過して、4 月下旬～9 月下旬に定植し、7 月上旬～翌 3 月中旬に収穫する。初春 2～3 月の育苗はビニールハウスなど加温できる施設内で行うが、晩春の 4 月以降は室外での育苗が可能である。葉ネギは低温には強く、霜が降った後も生育が遅くなるだけで、凍死しないので、冬季にトンネル栽培して、随時収穫することができる。ただし、前年から栽培した葉ネギは春先以降の長日条件で抽苔するので、3 月中旬までに収穫を終えるべきである。

四国・九州の暖地では、2 月上旬～10 月下旬に随時播種することができる。60～70 日の育苗を経て、4 月中旬～12 月下旬に定植し、6 月下旬～翌 3 月上旬に収穫する。初春 2～3

月の育苗はビニールハウスなど加温できる施設内で行うが、4月以降は室外での育苗が可能である。前年から栽培した葉ネギは春先以降の長日条件で抽苔するので、3月上旬までに収穫を終える。

一方、球根タイプ葉ネギの栽培暦は図3に示す。

栽培地域	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
寒冷地 冷涼地				植付け					収穫			
中間地	収穫		植付け		収穫							
温暖地	収穫		植付け			収穫						

図3. 各地域の球根タイプ葉ネギの栽培暦

北海道や東北のような寒冷地域および海拔の高い高原冷涼地では、露地栽培は雪が融けた春先の4月中旬から初秋の9月下旬までに球根の植え付けが可能となり、40～60日後の5月下旬～11月下旬に収穫する。ビニールハウスなど加温できる施設では、冬季でも栽培することができる。

関東や東海の中間地域では、3月下旬～9月下旬に球根の植え付けを行い、5月上旬～翌3月中旬に収穫することができる。葉ネギは低温には強く、霜が降っても、生育が遅くなるだけで、凍死しないので、冬季にトンネルにして、随時収穫することができる。ただし、春先以降の長日条件で抽苔するので、3月中旬までに収穫を終えるべきである。

四国・九州の暖地では、3月中旬～10月下旬に球根を随時植え付けることができる。4月下旬～翌3月上旬に収穫する。春先以降の長日条件で抽苔するので、3月上旬までに収穫を終える。

以下は葉ネギ栽培の具体的な農作業を説明する。なお、葉ネギは病害虫に対する抵抗性が強いが、病害虫防除の観点から同じ圃場での連作を避けるべきである。

## 1. 耕起と整地

葉ネギは浅根性作物で、通気性と保水性がよく、柔らかい土壌が適している。また、乾燥に強いが、土壌水分が不足すると生育が抑えられる。一方、土が過湿になると、逆にべと病、黒斑病、白色疫病などが発生しやすくなる。良質の葉ネギを育てるために地下水位が30cm以下で、周辺の圃場（水田）や農業用水路からの浸入水がなく、排水が良く、透水性（水はけ）の良い砂壤土または壤土質の圃場を選択して、通気性の悪い粘土地や水はけの悪い土地での栽培を避ける。

耕起とは畑の土を耕し、栽培に適した大きさの土塊にして、耕作土層を形成する作業であ

る。耕起は前作物の残渣を土の中にすき込んで腐熟を促進させることや土の中に空気を入れて乾燥を促進し、有機態養分を無機化させる等の役割もある。整地とは耕起された土塊をさらに細かく砕き、播種や移植に適する状態にする作業である。

整地した後、定植の前にクワやうね立て機を使って、うねを立てる。管理上の都合で、葉ネギの慣行栽培は4条植えである。

4条植えはうね間100～110cm（うね面約60cm、通路幅30～40cm）のうねにする。うね高が10cmほどでよいが、水はけの悪い圃場ではうね高を15～20cmにする必要がある。

畑の耕起と整地作業に下記の注意事項がある。

- ① 土壌水分が多すぎると、耕起した土塊が大きく、整地の際に土を細かく砕きにくく、作業効率が悪くなるので、必ず畑が乾燥の状態で行う。
- ② 葉ネギは浅根性の作物で、耕起深度（耕深）が20cm、整地のハロ耕深が10cmを目安に行う。
- ③ 葉ネギは固い土の塊や石、未熟堆肥などに直接に触れると、その生育が阻害されるので、耕起・整地の作業中にこれらの障害物をできる限り取り除く。

## 2. 土壌 pH 調整と基肥施用

葉ネギは生育の適正土壌 pH が 6.0～7.0 で、酸性土壌には生育が抑制され、病気も発生しやすい。また、生育に多量のカルシウムを吸収するので、土壌 pH 調整とカルシウムを補充するために苦土石灰など石灰質肥料を施用する必要がある。石灰質肥料を施用する場合は、土壌 pH が 7.0 を超えないように施用量を適宜に調整する。

種子タイプ葉ネギの生育期間が長い、生長が緩慢で、養分需要量が割と少ないほうで、必要な施肥量は 10a あたりに窒素 15～20kg、りん酸と加里がそれぞれ 10～15kg である。球根タイプ葉ネギは生育が早く、多回収穫もあり、養分需要量が若干多くなり、必要な施肥量は 10a あたりに窒素 20～25kg、りん酸と加里がそれぞれ 15～20kg である。1500～2500kg の堆肥を基肥として施用する場合は、窒素、りん酸、加里の施肥量をそれぞれ 5～8kg ほど減らすことができる。ただし、前作種類と土質、堆肥の投入有無により圃場ごとに大きく異なるので、作付け前に土壌診断を行い、適正な施肥設計が必要である。

石灰質肥料は全面全層施肥を行う。圃場を耕起する前に石灰質肥料を全面撒き、堆肥を使う場合は同時に堆肥も撒き、耕うんを通して作土層に混合させてから整地を行う。

定植後の栽培期間が長いので、種子タイプ葉ネギは 1～2 回の追肥、球根タイプ葉ネギは収穫回数により 3～4 回の追肥が必要である。基肥と追肥の配分はりん酸と加里の 1/2～全量を基肥にして、追肥には 1/2 以下にする。窒素が逆に 1/3～1/2 を基肥にして、1/2～2/3 を追肥にする。葉ネギはその辛味と独特の香りがほとんど有機硫黄化合物なので、硫黄など硫黄の多い肥料を使うと、辛味と香りが濃厚になり、品質が上がる。

露地栽培では基肥はうね内局部全層施肥を採用するが、ハウス栽培では全面全層施肥を行う。うね内局部全層施肥とはうね立て機を使って、うねを作ると同時に肥料をうね内に施



用し、作土と混合する方法である。全面全層施肥とは、耕起後、基肥を圃場に全面散布して、整地を通じて肥料と作土を混合させてから平うねにする方法である。

土壌 pH 調整と基肥施用には下記の注意事項がある。

- ① 未熟な堆肥や硬い固形物のある堆肥は根の障害を引き起こすので、その施用を避ける。
- ② 石灰質肥料を使って土壌 pH を調整する場合は、pH が 7.0 を超えないように注意する必要がある。

### 3. 播種・育苗

種子タイプ葉ネギは発芽と苗期の生育が非常に緩慢である。壮健な苗を育つために、天候など外部環境の影響を最小限に抑える必要がある。従って、慣行栽培では育苗箱やセルトレイに播種して、ビニールハウスなどにある程度の大きさに育ててから圃場に定植する。特に春播きは早春の寒さに対抗して、必ず加温のできるハウスに育苗を行う。

#### ① 播種

育苗箱やセルトレイを使う播種は次の通りで行う。

育苗箱を使う場合は市販の培土を詰めた育苗箱に条間 5~8cm で種をスジまきしてから、極薄く覆土して乾燥防止のために不織布をべた掛けしてその上に水をたっぷり撒く。

セルトレイ育苗の場合はセル穴 3~4cm、深 4.5~5cm の 72 穴または 128 穴の育苗トレイを用意して、1 つのセルに 3~4 粒の種子を播いて、極薄く覆土してその上に不織布等でべた掛けして、たっぷり灌水する。

早春では播種した育苗箱またはセルトレイをビニールハウスなど暖かい所に置き、約 20℃を保つ。暖かくなった 5 月以降播種のセルトレイまたは育苗箱を風通しの良い露地に置き、防虫ネットで害虫の侵入を防ぐ。播種後、1 日 1 回たっぷり灌水して、湿潤状態に保つ。播種約 7~10 日後に芽が出た時点で速やかに不織布を撤去する。

直播きの場合うねに条間約 15cm の間隔で薄い板か先端の尖った金属棒で深さ 1~2cm、幅 2~3cm の播種溝を開き、1~2cm ほどの間隔で種を播種溝に播いて、手のひらまたは板で 0.5cm ほど薄く覆土してからもみ殻を撒くか不織布をべた掛けしてその上に水を撒く。18~22℃の地温では播種後 7 日ほど発芽するが、それより低い温度ではさらに日数がかかる。

#### ② 間引き

育苗箱とセルトレイ育苗の場合は定植の際に弱い苗や奇形苗を除去するので、育苗期間中に間引きが不要である。直播きの場合は播種約 30 日後、本葉が 2~3 枚になる頃に間引きを行い、株間 5~10cm にする。

播種 60~70 日後、本葉 3~4 枚が展開した際に圃場に定植する。育苗箱の場合は苗を取り出してから弱い苗や奇形苗を選別除去して、壮健の苗を圃場に定植する。セルトレイの場合は、セルから苗を取り出し、そのまま圃場に定植する。図 4 は播種・育苗の模式図である。

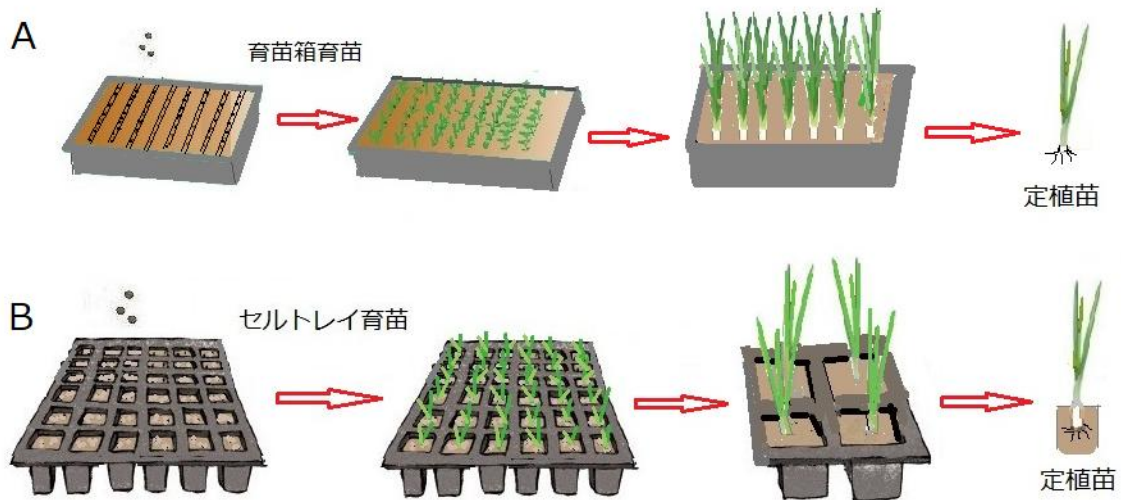


図4. 種子タイプ葉ネギの播種・育苗模式図 (A: 育苗箱育苗、B: セルトレイ育苗)

気温などの天候により計画通りに定植できない場合は、定植適期苗を育苗箱やセルトレイに引き続き育苗しても問題がない。

播種・育苗には下記の注意事項がある。

- ① 葉ネギの発芽温度は15～25℃、最適発芽温度18～20℃である。15℃未満の低温と25℃を超える高温では発芽率が大幅に低下し、発芽した苗も弱くなるので、春播きでは保温できる育苗ハウスで、夏秋播きでは風通しの良いところで、寒冷紗など遮熱資材で日中の高温強日射を遮断する。
- ② 葉ネギの種子が乾燥に非常に弱く、土壌が乾燥して水分不足の場合は発芽に必要な日数が長くなるうえ、発芽した苗も弱いので、播種後、育苗箱やセルトレイでは不織布をべた掛けして保湿を行う。直播きではもみ殻を撒くか不織布をべた掛けして保湿を行う。ただし、発芽が見られたら、不織布のべた掛けを速やかに撤去する。
- ③ 葉ネギの種子は発芽時に土を突破する力が弱いので、播種後の覆土を極力薄くして、覆土厚が0.5cm以内にする。
- ④ 土壌が乾燥すると、種が発芽しにくくなる。発芽を促進するため、播種後たっぷり水を撒く。育苗期間中に土壌水分が少ない時は必ず灌水を行う。特に夏秋播きでは高温強日射の影響で乾きやすくなるので、毎日灌水を行なう。ただし、徒長による軟弱苗を防ぐため、灌水は午前中にして、日暮れの頃に土がやや乾く状態にしておく。

#### 4. 定植

育苗箱で育苗する場合は播種60～70日後、苗が3～4枚本葉を展開した時点で圃場に定植する。定植後の苗活着を促進するために、スコップまたは移植ゴテで苗掘り起こして、弱い苗や奇形苗を除去して、壮健な苗を圃場に定植する。

セルトレイ育苗の場合は、播種約60日後、3～4枚の葉が展開した時点でセルから苗を抜

いて培土が付いている状態で圃場に定植する。定植の2～3日前にまず灌水を打ち切り、移植前日には1回たっぷり灌水して、セルに水が十分に浸みるようにすれば、苗がセルから抜きやすくなる。弱い苗などを除去する必要がある。

うねに条間15～20cm、株間10～15cmになるように移植ゴテまたは先端の尖った金属棒などを使って、直径約5cm、深さ4～5cm定植穴を開き、育苗箱で育った2～3本の苗を束にして穴に立てかけ、土を被せて土と根を密着させるように土の表面を軽く押える。

セルトレイで育苗した苗は培土の付いたセル状のまま定植穴の底に立ててからセルを完全に隠すように覆土する。

図5は定植の模式図である。

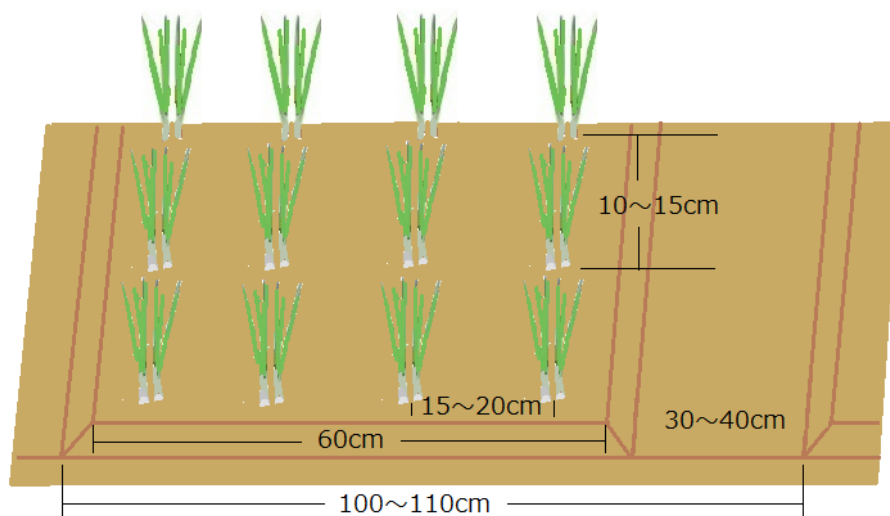


図5. 葉ネギの定植模式図

葉ネギの耐乾燥性が強いが、圃場の土を根に密着させ、活着を促進するために定植した後に1回だけ水を撒く必要がある。

定植作業の注意事項は下記の通りである。

- ① 植付けに厚く覆土しない。覆土が厚すぎると生長点が土に埋まれ、成長しないか、生長が遅くなる。定植時に根が完全に隠すように覆土する必要があるが、葉の分岐部より上の部分を埋めないようにする。
- ② 欠株を生じないように2～3本苗を束にして定植する。
- ③ 大株の九条ネギなどは条間と株間をやや大きく空けて、万能ネギなど小株のネギは条間と株間をやや狭くする。
- ④ 定植する際にオルトラン粒剤などの殺虫剤を事前に定植穴に散布すれば、生育初期の害虫防除に非常に有効である。

## 5. 球根の植付け

球根タイプ葉ネギは球根を圃場に植付けることで栽培する。移植ゴテまたは穴開き器を



使って、うねに条間 15cm、株間 10~15cm に植付け穴を開け、球根 2~3 球を合わせて頭部を上にして植付け穴に入れる。球根の頭部が土から少し出るような深さを目安にして覆土する。植付け後、1 回たっぷり水を撒く。植付け 5~7 日後、球根が萌生して、新葉が出てくる。その植付け作業の模式図は図 6 に示す。

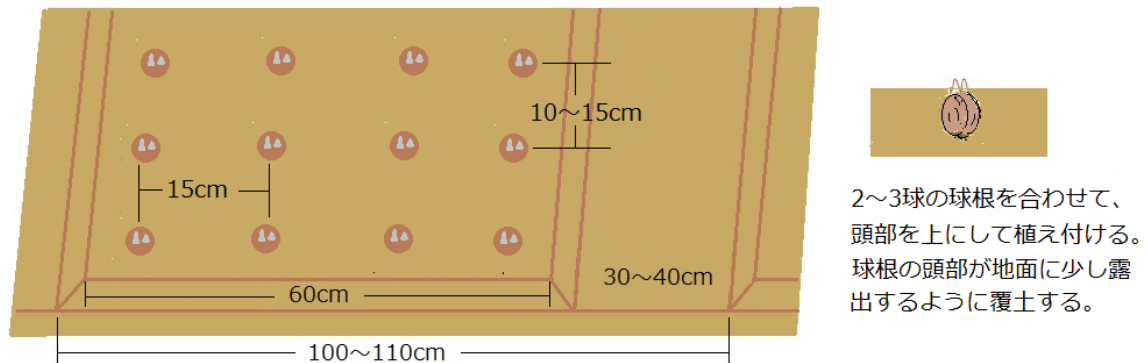


図 6. 球根タイプ葉ネギの植付け模式図

球根の植付け作業の注意事項は下記の通りである。

- ① 欠株を防ぐため、植付け穴に 2~3 球を合わせて植え付ける。
- ② 新葉が出やすいために、植付け時に球根の頭部（先端部）を上にして、地面から少し露出するように覆土を薄くする。
- ③ 植付けの際にオルトラン粒剤などの殺虫剤を事前に植付け穴に 2~3 粒投入すれば、生育初期の害虫防除に非常に有効である。

## 6. 追肥

種子タイプ葉ネギは定植後の栽培期間が 60~90 日もあり、1~2 回の追肥が必要である。

1 回目の追肥は定植 30~40 日後に行う。10a あたりに窒素 3~5kg を条間にすじ状に撒く。通常、この 1 回の追肥で済むが、収量を増やすまたは収穫時期を延ばす場合は、1 回目の追肥を行った 25~30 日後に 2 回目の追肥を行い、10a あたりに窒素 3~5kg を条間にすじ状に撒く。

球根タイプ葉ネギは数回の収穫があるので、植付け後から 1 回目の収穫までに追肥が不要であるが、2 回目以降の収穫後に速やかに 10a あたりに窒素、リン酸、加里それぞれ 3~5kg の化成肥料、または 3~5kg の窒素肥料を条間にすじ状に撒く。なお、追肥後速やかに中耕して、根元へ薄く土寄せを行う。

追肥作業の注意事項は下記の通りである。

- ① 硫安など硫黄の多い肥料を使う。葉ネギはその辛味と独特の香りがほとんど有機硫黄化合物なので、硫安など硫黄の多い肥料を使うと、辛味と香りが濃厚になり、品質が上がる。
- ② 肥料焼けを防止するために、肥料を葉ネギの茎葉に接触させないように注意深く撒く。
- ③ 肥効を高めるために、球根タイプ葉ネギは追肥後速やかに中耕・培土を行い、肥料粒子

を地表に出ないように薄く覆土する。種子タイプ葉ネギは葉への損傷を防ぐために、追肥後は中耕しない。

## 7. 中耕・培土

葉ネギ栽培に於ける中耕・培土は、クワ等で条間の土を耕起し、葉ネギの根元に覆土する作業である。その役割は除草しつつ、追肥を覆うことで、肥料利用率を上げる。

種子タイプ葉ネギは中耕・培土が不要である。球根タイプ葉ネギは追肥の後に中耕・培土を行う。その回数は追肥の回数と同じである。

中耕・培土には下記の注意事項がある。

- ① 追肥後に速やかに中耕・培土を行う。
- ② 培土は植株の葉鞘部分より上に土がかからないようにする。葉鞘部分以上に培土をした場合は、生長点が埋められて、萌芽が阻害される恐れがある。

## 8. 病虫害と雑草防除、生理障害

葉ネギは病気に対する抵抗性が強く、害虫の被害も受けにくいですが、被害を受けると減収するほか、商品にならない恐れもあるので、病虫害に注意が必要である。葉ネギ栽培によく発生する病虫害名と防除法は表 1 にまとめる。

表 1. 葉ネギ栽培によく発生する病虫害とその防除法

病虫害名	病原菌・害虫	発生時期・被害症状	防除法
べと病	糸状菌	全生育期間を通じて葉に発生。発病初期は葉に境界がはっきりしない長楕円形、大型の黄白色斑紋が発生し、やがて斑紋上に白いカビが生える。カビはしだいに暗緑色～暗紫色に変わる。越冬ネギでは病斑は生じないが、生育が停止して草丈が低くなり、葉全体が厚く、白色から黄色に変わる。暖かくなると葉の表面に白色のカビが生じたのち、黄変して枯れる。連作、水はけが悪く、風通しの悪い圃場で発生が多く、春先や晩秋の低温多雨の環境に発生しやすい。	連作を避ける、密植しない、薬剤散布。
さび病	糸状菌	全生育期間を通じて葉に発生。初めに葉の表面が膨らんだ円形の斑点が見られ、後にその中央が橙色に変わり、中心が縦に割れ、そこから黄褐色の粉（夏孢子）が飛散する。病徴が進むと、この斑点に接して褐色の長い楕円形	連作を避ける、薬剤散布、発病株の早期除去。

		もしくは紡錘形の別の斑点ができ、鉛色で膨れ、縦に割れ紫褐色の粉（冬孢子）が飛散する。激発すると葉は黄色い粉に覆われ、乾枯し倒れる。春先や晩秋の 23℃以下の低温多雨の環境に発生しやすい。	
黒斑病	糸状菌	全生育期間を通じて葉に発生。初めに葉に楕円形～紡錘形でややへこんだ 3mm 程度の淡褐色～暗紫色小斑点を生じる。病斑は次第に長さ 3～5cm の紡錘形に拡大し、同心輪紋になり、その上に黒いすす状のカビ（分生孢子）を生じる。多発すると葉が折れやすくなる。高温多雨の環境に発生しやすい。	連作を避ける、 薬剤散布、発病株の早期除去。
ヨトウムシ	昆虫	成虫が葉に産卵して、孵化した幼虫が葉を食害する。9～10 月に多発。	薬剤散布、防虫ネット
アザミウマ	昆虫	幼虫・成虫ともに葉に寄生して葉の表面を舐めるように吸汁加害し、カスリ状の小白斑を残す。ネギの緑色部に食害の痕が残ると品質が著しく損なわれる。夏の高温で少雨、乾燥した環境に多発。	薬剤散布、防虫ネット
ネギコガ	昆虫	成虫が葉に産卵して、孵化した幼虫が葉に穴を開けて内部に潜り、葉の内側から表皮を残して食害する。被害部分には小白点や若干蛇行した線状の白斑が現れて、葉の所々に穴が開く。6～10 月に多発。	薬剤散布、防虫ネット
アブラムシ	昆虫	全生育期間に発生。葉から汁液を吸う。吸汁によって生育不良となる。	薬剤散布

病気と害虫は圃場を観察して、発生初期からの防除に努める。種子タイプ葉ネギの定植時と球根タイプ葉ネギの植付け時に定植穴または植付け穴に浸透移行性殺虫剤（オルトランなど）を数粒撒けば、栽培初期の害虫防除に非常に有効である。

葉ネギは生育が緩慢で、株丈が低く、株間も広く開けているので、雑草との競争に負けることが多い。葉ネギ圃場によく発生する雑草はほとんど 1 年生草であり、主な雑草種類を表 2 に示す。

表 2. 葉ネギ圃場に発生する主な雑草

雑草名	ナズナ、ハコベ、オオイヌノフグリ、スカシタゴボウ、シロザ、イヌタデ、ヒエ、ハ
-----	--

	キダメギク など
--	----------

雑草は除草剤による除草と中耕で防除する。通常、種子タイプ葉ネギは圃場に茎葉処理型の除草剤を全面散布して、早期発生した雑草を殺した後定植する。その後、栽培期間中に発生する雑草は手で抜き取る。雑草の発生がひどい場合は茎葉処理型の除草剤を植株にかからないように通路側に散布する。

球根タイプ葉ネギは植付け前に圃場に茎葉処理型の除草剤を全面散布して、発芽した雑草を殺してから植付けする。その後、栽培期間中に発生する雑草は手で抜き取り、収穫後の追肥時に中耕を行うことで雑草を除去する。

葉ネギの栽培によくみられる生理障害は抽苔である。抽苔した葉ネギは葉が固くなり、食用に不適である。

葉ネギは低温感応型の植物で、低温により花芽分化が誘起される。茎葉展開期に 10°C 以下の低温に 20～30 日遭遇すると、花芽が分化形成して、その後の高温と長日の環境に抽苔する。花芽分化は品種、株の生育状況と栽培地域により異なるが、一般的に 7～10 月の秋播き葉ネギは冬の低温に感応して、翌年春先の 4～5 月頃に抽苔・開花する可能性がある。

対策は抽苔の遅い品種を選ぶほか、3 月中旬までに収穫するように種播きまたは球根の植付け時期を調整する。

## 9. 収穫

種子タイプ葉ネギは定植約 60～90 日後、草丈が 30～40cm に成長した時点で収穫が可能となる。多年生植物なので、抽苔しないかぎり、いつでも収穫できる。なお、栽培期間が長いほど株が太くなり、分けつにより株数も増え、収量と品質が上がる。

球根タイプ葉ネギは植付け約 40～60 日後、草丈が 30～40cm に成長した時点で収穫が可能となる。

葉ネギは葉が細長く、折れやすいので、機械収穫に不向きであるため、すべて手で収穫を行う。

種子タイプ葉ネギは手で株の下部を掴んで根と一緒に引き抜く。抜き取った葉ネギの根に付いている土を落としてからハサミで根を切って、枯れた古葉などを剥き捨ててからコンテナに入れて持ち帰る。

球根タイプ葉ネギは多回収穫が可能なので、鎌かハサミで地面から株元を 3～4cm 残すように葉鞘と葉を切り取って、コンテナなどに入れて持ち帰る。葉を切り取った後、追肥と中耕培土を行う。土に残っている根元が約 3～5 日後に再び新葉が萌生して、約 30～50 日後に草丈が 30～40cm に伸びた時点で再度収穫を行う。大体 3～5 回収穫ができる。

図 7 は葉ネギの収穫模式図である。

収穫作業には下記の注意事項がある。

- ① 鮮度維持のために収穫作業は早朝に行い、午前中に終了する。葉は早朝の水分が一番高

く、みずみずしく、長持ちするうえ、食感も良い。

② 葉ネギの葉が折れやすいので、必ず株元を掴んで全株を引き抜くか葉だけを切り取る。

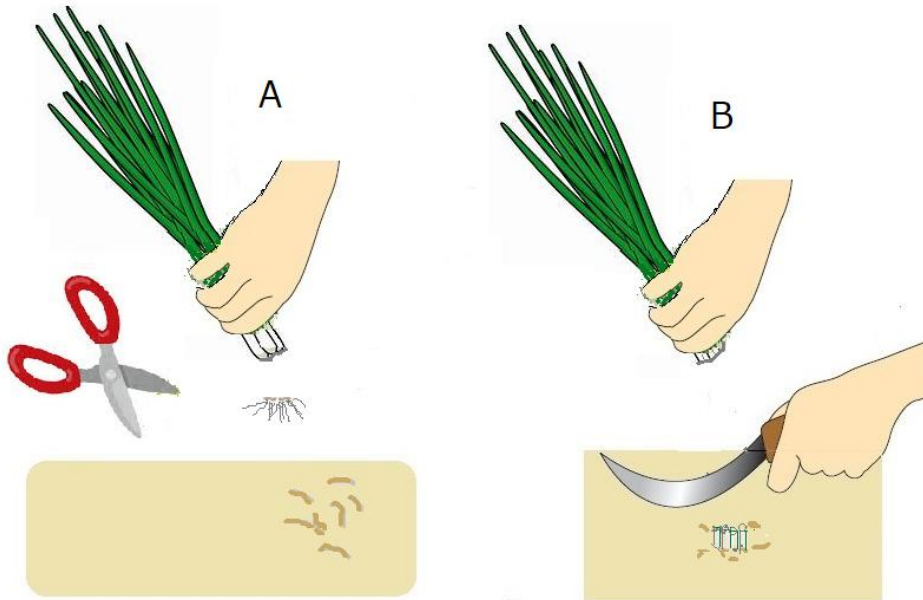


図 7. 葉ネギの収穫模式図 (A : 種子タイプ、B : 球根タイプ)

## 10. 種球（球根）の採取

種球用の球根タイプ葉ネギは収穫回数を 3 回までにして、最後の収穫を終えてからしっかり追肥して新たに萌生した葉を育て、株元の分げつとそれに伴って発生した子球の肥大を促す。大体 50～70 日栽培した後、球根を掘り出して、風通しの日陰で乾燥させて保存して、次の栽培に供する。栽培期間に球根が数回の分げつを経て、最初に植えた 1 個の種球が 10 個以上の子球に増やすことができる。

種球の採取作業には下記の注意事項がある。

- ① 収穫回数の多い球根は肥大が悪く、貯蔵養分が少ないので、種球としては使えない場合がある。収穫回数を 3 回以内に限定する
- ② 種根を採取するために、収穫後に萌生した葉を 50～70 日以上に生育させ、球根をしっかり充実させる。
- ③ 掘出した種球は日陰で乾燥させて保存する。高温多湿など保管条件が悪ければ、カビが発生したり、萌芽率が悪くなったりなどのリスクが発生する。
- ④ 種球の保存期間を 12 ヶ月以内にする。種球が生きものなので、保存期間が長くなると、乾燥により枯死するリスクが高く、古い球根の萌芽率も悪くなる。

## 10. 調整・選別

全株の形で収穫した葉ネギは根を切り落とし、枯れた外葉などを剥き取るなどの調整作



業を行い、きれいな状態にする。調整した葉ネギは数本ごとに纏めにテープで束にしてから、ポリスチレンフィルムを使って包んで段ボールに入れる。鮮度維持のために速やかに 5℃ まで冷却してから出荷する。

葉だけを収穫した葉ネギは、枯れた葉や黄化した葉、混ぜ込んだ雑草などを取り除いてからポリスチレンフィルムを使って包んで段ボールに入れる。鮮度維持のために速やかに 5℃ まで冷却してから出荷する。

葉ネギは短期保存したい場合は調整済みの状態で冷蔵庫に入れ、0～5℃、湿度 95～100% の環境では 1 週間程度の貯蔵が限界である。それ以上に長く保管すると、葉が次第に脱水して萎びるまたは切り口から腐る恐れがある。それよりさらに長く保存したい場合は、圃場に残して需要に応じて収穫した方がよい。